日泰翻訳における日中翻訳技法の応用可能性に関する考察

―岸田総理タイ訪問寄稿文を元に―

Zhenhuan Yang（楊 振寰）

要旨

本研究は日中翻訳技法の日泰翻訳への応用可能性を探究することを目的とするものである。日中両言語間の翻訳技法に、遠藤（1989）が提示した７つの技法（加訳、減訳、反訳、変訳、倒訳、合訳、分訳）があり、それが多くの研究に引用され、発展している。一方、日泰翻訳技法については、これまで研究があまりない。タイ語と中国語は同じ孤立語であり、その相似性から、日中翻訳技法を日泰翻訳への応用可能性が示唆される。本研究は、原文と訳文の一般性や権威性などを基準に、日本国外務省が掲載した岸田総理タイ訪問寄稿文およびタイのマティチョン紙に掲載されたその訳文を研究サンプルにし、訳文を原文と照らし合わせながら、その翻訳がどの日中翻訳技法に相当するか統計して、検討・分析を行った。結論として、7 つの日中翻訳技法のうち、加訳、減訳、変訳、倒訳技法は日泰翻訳に応用可能であるが、合訳と分訳は遠藤の定義を少し改めれば、応用可能であることが導き出された。また、反訳については、今回の研究サンプルに現れていないため、今後、研究対象として適当なサンプルを追加し、再検討する必要がある。

キーワード　*日泰翻訳*　*日中翻訳技法*　*翻訳研究*　*翻訳ストラテジー*　*遠藤紹徳*